（第２号様式）

令和５年４月５日

神奈川県教育委員会教育長　殿

県立　　相模原中等教育学校長

令和４年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 8,14 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	・中高一貫教育の特色ある教育課程を策定し、知的好奇心を引き出し、高い学力と志を身に付けさせる。 ・探究学習を中心にカリキュラム・マネジメントを展開し、「自ら考え・調べる」姿勢を育成する。 ・主体的・対話的な深い学びの「深い学び」を重点研究し、言語活動の充実を図りながら科学的根拠に基づく理論的思考、表現力を育成する ・国際社会へ貢献できるよう英語運用力向上を目指す。	①カリキュラム・マネジメントの推進 ②思考力・判断力・表現力を高める振返りシートの研究 ③生徒の英語運用力の具体的達成目標を設定させる指導の実践 ④一人一台 PC に向けた IT 活用授業の普及	①「職員による協働的な授業づくり」として教科横断授業を推進する。 ②総合的な探究の学習におけるパフォーマンス評価の研究と全教科対応本校版振返りシートを作成し教員間で試行する。 ③本校独自 CAN-Do リストを生徒配付し、目標到達度確認指導をする。 ④実践事例を共有する	①授業研究の観点として通年の取組ができたか ②試行事例を 20 件程度回収し検証することができたか ③実用英語検定取得者数とＧＴＥＣスコア学年平均値の経年変化検証 ④事例は何件集約できたか	①研究日３日全体研修１回を通し、５つの教科横断授業が実践された。 ②総合的な探究の学習におけるパフォーマンス評価の研究は継続できた。 ③英検取得者調査と CAN-Do リストを配布しCEFER基準等の説明を統一で行った。 ④約８割の授業で Google Forms やロイロノート等の ICT 機器が利用されていた。	①同一テーマで研究・研修・公開授業をつなげたことは効果的であった。 ②担当者の事例として周知し、次年度に向けてフォーマットを作成した。 ③基準を生徒自身が活用できるよう継続していく。 ④状況に応じて、効果的に ICT 機器と板書を使い分ける等、ハイブリッド活用を推進していく。	③英検の受験を奨励するのみならず、受験方法についても周知して欲しい。また、GTEC の結果を配付したときに、保護者にもマチコミ等で連絡して欲しい。（保護者） ③英検受験率について数値にかかわることは年度末に示すべきである。（運営協議委員） ④使用しない約２割の理由を抽出して、改善につなげるべきである。（運営協議委員）	①他教科と連携することで授業の幅が広がり、生徒へその意義が伝えられるとよい。「教科横断授業」を効率よく日常的に考えられる環境が課題である。 ②「指導と評価の一体化」の一環でもある振返りシートは課題が大きい。感想の振返りにならないよう基準を教職員が事前に定める必要がある。 ③CAN-Do リストが生徒に共有されたことで、授業の目標設定および改善への糸口となった。３年生の英検受検率は７割となった。 ④前期生 GIGA スクール構想があるため後期生一人一台 PC 活用はスムーズな開始となった。	①教科単位から教科横断で検討する体制を検討したい。 ②新学習指導要領への授業づくりの集大成として「指導と評価の一体化」と合わせ取り組みたい。 ③7 月の英検取得率の保護者お知らせは学校と家庭の指導の一体化につながっている。今後も継続していく。 ④前期課程からの一人１台PCの活用により、後期課程での実践も問題はない。今後も実践例を共有し、活用幅を広げていく。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	・自主自律を推奨し、目標達成を諦めない精神力と規範意識、思いやりをもって下級生を指導するリーダー意識を醸成する。 ・６年間を安心して過ごせるよう生徒・保護者が利用しやすい教育相談体制を確立する。	①生徒による生徒会活動目標設定と振返り指導の徹底 ②前期課程生の登校しやすい環境づくりにつながる取り組みを再検証する。	①目標設定期間と公表日を設定し組織的に周知させる。 ②互いの親睦を深めるための体験芸術プログラムやアイスブレーク週間を設定する。	①　生徒の目標認知度の検証 ②体験芸術プログラムやアイスブレーク週間のアンケート検証	①月１程度の改定案を提示した。昼放送を活用し、全体周知もうまくできた。 ②前期課程で体験プログラム、全校で年２回のアイスブレーク週間を設定し、学校満足度の調査も実施した。	①「学校を変えていい」という新たな意識を醸成することはできた。変えるための手順を指導していくことが職員指導力の向上につながる。 ②満足度調査は「ほぼ満足」を含ませると全学年 95%越えとなったが、1 年の「満足している」は 56%で他学年より低い数字となった。	①校則や制服も見直し時期に来ているように感じる。（保護者） ①学校を変えてもよいという発想はいい傾向である。やりたいことができる経験や合意形成を作るうえでも意義がある。（運営協議委員）	①「きちんと前例踏襲」という文化から「継承と深化」、学校を変えていいという発想が広がった。組織を考え、未来につなぐ発想はリーダー育成にもつながる。 ②満足度調査や情報交換会議、議事録を策定し、支援体制を整えることができた。また、職員自らが「教育相談研修」を２回開催し、思春期である前期課程生の支援体制の重要度が共有された。	①生徒による今年の漢字に「変」が選ばれたことから鑑みても、生徒による改革は根付いている。人による試みに終わらせず、「何を軸にどれをどのように形にするのか」を考えさせ、手順を踏まえ、今後も取り組ませたい。 ②生徒の SOS に早く気づき、つながる体制を今後も重点化していく。「指導と支援」の両輪で目指すべき生活と手立てを示し寄り添っていく体制を確立する必要がある。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 8, 14 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
３	進路指導・支援	・５教科受験での国公立大学を推奨し、60 名以上の現役合格者を目指す。諦めさせない進路指導により、国立大・難関大第一志望現役合格率 75%を目指した段階的・体系的な支援・指導を行う。 ・高い志を維持させるため、実践・経験値を高めさせ、自己変容のプロセスを重視したキャリアプランニングを指導する。	①キャリア設計と探究学習を結び付け、自己理解を深めさせる。 ②主体的学びおよび社会貢献の意識付けとして、コンテスト等の参加意欲を高める。	①論文作成後、探究学習の振返りとしてのキャリアシートを整備する。 ②参加経験のある生徒による募集説明会を実施する。	①探究学習を通しての自己理解とのかかわりを検証する。 ②参加者数の検証	①前期、後期課程ともキャリアパスポートを修正した。 ②校外学習連絡掲示板を設置し、情報収集しやすい環境を整備した。また校内では土曜講座を 6 回開催し、延べ参加者数は 99 人であった。	①前期課程生には学校生活振返りとしてキャリアパスポートを冊子化に着手した。年度をつなげた振り返りが期待できる。 ②14 以上のコンテストに 160 名を超える生徒が参加した。主体的な学習に向けて意欲を引き出すことができた。	①保護者も参加できた講演会は、非常に刺激的で有意義であった。今後も保護者参加型のイベントを増やして欲しい。（保護者） ②主体的な学びを促進する意味でも、コンテストへの参加を継続して奨励して欲しい。また、保護者にも情報を共有してもらえると、子どもたちとの会話のきっかけにもなるので良い。（保護者） ②数値目標を掲げている以上、年度末には結果を数値で示すべき。（運営協議委員）	①自己理解を深め、「チャレンジ」する生徒が増えたと実感できる。応募したなかには多くの生徒が受賞しており、校内発表の機会を与えることで、さらに意欲を引き出した。 ②研究開発グループの取組で「神奈川県職員功績賞」も受賞した。独自の「SSS 振返り」コンピテンスベースの振返りが導入された。	①生徒の現状を共有することで、意欲をさらに引き出せることが分かった。個人でのコンテスト等の参加者数を紹介し、意識を高める。 ②「SSS 振返り」で意識付けと現状把握の両得を目指し、よりよい取組を研究していく。
４	地域等との協働	地域交流から社会貢献意識を醸成する。神奈川県を代表する中高一貫教育校としての魅力を発信し、6 年の学びの意欲を引き出す広報、開かれた学校づくりを推進する。	①地域清掃の定着と防災計画の周知徹底と職員訓練の見直し ②生徒像を広報し、入学者自身の入学意欲を引き出す。	①美会委員による地域清掃の振り返りの実施と被災時の職員初期対応の整理 ②生徒作成の動画やアニメーションを活用する。	①美化委員会の振返り共有と職員訓練の実施はできたか ②参加者アンケートの実施	①地域清掃の定例化で地域の一員という意識を持させた。 ②生徒による学校説明会企画では小学生参加型に変更し、入学へのマッチングを意識してもらうことができた。	①地震と火災同時発生の訓練は実践的であったが、マニュアルが散在している。 ②生徒の広報アイデアは目を見張るものがある。広報活動への生徒参画を広げたい。		①学校危機管理マニュアルの整備を年度内から始めたことにより、防災活動を見直すことができた。 ②小学生が参加しやすい視点は生徒のほうが持っている。広報活動に生徒のアイデアを吸収させたい。	①災害時の職員分担が災害の種類ごとで策定されているので、一覧にし、分担確認、初動への意識を高めたい。 ②広報担当生徒とともに広報資料を見直していく。
５	学校管理 学校運営	業務を組織的に可視化させ、効率向上から働き方改革を推進するとともに若手 OJT を推進する。地域から信頼されるため、職員一人ひとりが県職員としての自覚を持ち、事故防止意識を持って取り組む。	①帰宅しやすい環境づくりと意識改革のために具体的な取り組みをする。 ②同僚性の醸成を図り、不祥事防止の意識を高める。	①ノー会議デーや帰宅宣言カードを導入する。 ②不祥事防止研修に年２回職員による企画を導入する。また、点検を徹底する。	①時間外勤務時間、年休取得数の検証 ②研修会の実施と効果の検証および教務事項にかかる点検チェックリストの作成	①帰宅カードにより 48%の職員が帰宅時間を意識し、入学者決定業務における休日出勤もほぼ解消した。 ②同僚性醸成の研修を２回行い、いずれも好評であった。ヒアリハっと事例から解答用紙を色紙に変更する等の対応が迅速に行われた。	①確実に形にできるノー会議デーやデジタル採点、入学者決定業務の WEB 化、マークシート化は働き方改革に効果的である。物理的変化をさらに模索する必要がある。 ②ヒアリハットの共有化は効果的である。日常の学びとして研修資料としてまとめるなど活用していきたい。	①いまだに業務が多いように感じる。効率を求めることと、減らすものを減らすことは別である。 （運営協議委員）	①欠席連絡や採点、入学者決定業務の WEB 化、マークシート化等のデジタル化で劇的に業務量が整理された。予算を計画的に活用することが求められる。 ②不祥事防止の意識は高く、ヒアリハット事例の共有にも協力的である。そのような体制を活かし、今後も学校全体で取り組んでいきたい。	①意識だけではどうにもならないことの方が多いので、物理的な仕掛けで働き方改革を進めたい。次年度は留守番電話機能を付加し、時間外や会議時の対応を整理したい。 ②同僚性醸成の研修は職員提案の方が効果的である。職員間のつながりの良さは職場安定にもつながる。ただし２回設定は負担も大きいので、年１回を定例化させる。